2020年度　社会連携研究プロジェクト活動報告書

2021 年　4 月　16日

和光大学地域連携研究センター
　センター長　小 林　猛 久　殿

代表者氏名　加藤　巖

研究プロジェクトの名称
近隣小学校におけるアジア体験授業の推進
研究目的 本プロジェクトでは、近隣の小学校でアジア文化を紹介する授業を行い、児童たちの国際理解に貢献することを目的としていた。2020年度も教員と学生・留学生、外部専門家らが協力して各国の食や遊びなどの「体験」を組み込んだ異文化理解教育プログラムを実施する予定であった。また、体験授業から児童が何を学び、どのように日々の行動に取り入れていったのかに関する意識・行動調査も計画していた。調査結果を用いて、異文化理解に関して教育効果のより高い教育プログラムの構築を目指していた。

プロジェクト所属メンバー　（氏名の右の欄に、本学専任教員＝教、共同研究員＝共と記入してください。）

加藤　巖	教						
バンバン　ルディアント	教						
松田　朋子	共						

研究活動の経過（800字以内）（打ち合わせ、報告、招待講演、調査旅行などの月日、テーマ、報告者、目的地などを記入してください。）

本プロジェクトでは、アジア料理の調理人らを招いて実習を行ったり、各国で活躍する専門家を招いてお話を聞くなど、質の高い異文化体験の機会を提供する予定であった。これまでもプロの調理人（ネパール人）に参加したもらった授業は、料理の質（味はもちろんだが、盛り付けや料理の薀蓄など）が格段に洗練されていた。受講した児童や保護者からの評価も高く、当該年に行われた児童の研究発表会でも取り上げられた。

同時に、本学留学生らが授業へ参加し児童らと交流する予定であった。こうした草の根の活動は、近隣諸国の文化をより身近に感じさせると期待していた。また、過去に2度実施した（受講）児童の意識・行動調査と同様の調査を行うつもりであった。調査結果は、教育関係者らに有益なものになると考えていた。

ところが、2020年度前半はコロナ禍の影響を受け、（対面による）小学校での実践活動を取りやめざるを得なかった。このため、9月まではコロナ禍が終息した後に活動を始めることを想定して、（留学生を含む）学生たちと準備を進めることとした。ところが、年度後半になっても状況が好転せず、結局、小学校での活動は諦めることとなった。

その後、2020年10月になり、学生らと相談の上、2019年度に近隣小学校で実施した異文化理解教育の様子および、（学生たち）自らの異文化体験を書き記した冊子を作成して、関係者へ配布することとした。2020年3月に冊子は完成したので、今後、冊子を通じて、近隣小学校などに今後の活動を想像してもらうことを期待している。

また、異文化理解教育の効果を測るため、本来は小学生らの意識・行動調査をするつもりであったが、実施できなかったので、代替策を取ることとした。これまで本プロジェクト責任者が東南アジアの大学生ら向けに行った講演（外務省や現地大学）などで集められた報告書のテキスト分析を行うこととした（執筆中）。

研究成果の概要（1200字程度）（どのような方法で調査、研究を行ない、どのような新知見が得られたか。またそれを今後どのように活かすことができるか、など）

上述のように、コロナ禍のため、近隣小学校での実践活動を取りやめた。代わりに、2019年度の実践活動や（2020年度の活動に参加する予定だった）学生らの異文化体験を記した冊子（報告書）を作成した。冊子を通じて、近隣小学校の先生方には、今後の異文化理解教育の可能性を想像してもらいたい。かつ、冊子を読んだ関係各位から、今後の改善に向けた助言や提案をいただきたいと願っている。

なお、冊子作成にあたり、学生有志に編集作業を一任した。編集担当した学生は集めた原稿をすべて読み、内容の真偽確認から文章の平仄を整えるまで尽力した。本人いわく、学ぶことが多い作業だったという。学生の一部は出版関係の仕事にも興味を持ったようである。当初は想定していなかった教育効果が生まれた。

また、既述のように本プロジェクト責任者が東南アジアの大学生ら向けに行った講演や講義などで集められた文章（学生らが執筆したレポートなど）のテキスト分析を行っている。テキスト分析の結果は成果物として、学術誌へ投稿する予定である。

上記にあわせ、若いマレーシア人研究者らを日本に招いた共同研究から生まれた論文（3本）のテキスト分析を行った。若いマレーシア人研究者らは、日本における高齢者雇用の実例を学んだわけだが、彼女らの書いた論文をテキスト分析したところ、具体的な施策を記録するばかりでなく、高齢者雇用の社会的意義といったことを中心課題として取り上げていたことが分かった。

実は、高年齢者雇用の優れた実践を行い、厚労省から表彰された日本企業らがまとめた文章を分析すると、高年齢者雇用の意義といったことよりも、他社と異なる施策を具体的に紹介することに注力していた。

すなわち、日本では高齢者雇用は社会にすでに広く受け入れられており、その社会的意義を（あらためて）訴える必要性は低い。一方で、これから高齢化が本格化するマレーシアでは、まずもって、なぜ、高齢者雇用を始めるのか、その理由から説明を始めて、社会的意義を強調する必要がある。この論考は、日本地域学会『地域学研究』第50巻第2号に掲載予定である（査読了）。

上記の外国人学生や研究者らが書いた文章の一連のテキストマイニングから分かったことは、彼らは異文化の情報に触れると枝葉の情報より、もっと本質的な部分を捉えようとする（理解しようとする）傾向を持つ点である。我々は異文化理解教育を実施する際、往々にして細かい事実を伝えることだけに力を注ぎがちであるが、その背景や、そもそもの意義や意味を伝えることが有益だと理解できた。こうした知見は、今後の近隣小学校向け教育活動で活もかしていきたい。

最後に、本プロジェクトの活動と研究へご支援いただいた、本学地域連携研究センターの関係各位に御礼を申し上げたます。誠にありがとうございました。

成果の発表文献（標題、著者名、雑誌名、巻号頁、発行年等） （発行年は厳密に2020年4月～2021年3月に刊行されたものだけに限らず若干前後のものも含めてください）
和光大学国際経済学ゼミナール（編）『私たちの異文化体験と国際理解教育の実践』社会連携研究プロジェクト報告書 2021年3月
加藤巌「テキストマイニングによる高年齢者雇用の業種別特徴の抽出」経営行動研究学会（編）『経営行動研究年報』第29号(査読あり)2020年11月
加藤巌「高年齢者雇用を伝える学術交流の考察ーマレーシア人研究者の来日調査と成果の検証ー」日本地域学会（編）『地域学研究』第50巻第2号（査読あり）2021年10月予定

※　用紙が足りない場合は別紙を添付してください。

※　できるだけこのデータに入力いただき、Eメールでご提出ください。

※　提出期限：2021年4月30日（金）　提出先=企画室企画係(岡本) kikaku@wako.ac.jp(企画係)